

【1】プッチーニ：菊の花

ジャコモ・プッチーニ（1858－1924）は「蝶々夫人」、「トスカ」、そしてフィギアスケートで有名になった「誰も寝てはならぬ」が含まれる「トゥーランドット」などのオペラを書いたイタリアの作曲家で、2曲目の作曲者ヴェルディの次の世代に当たります。大衆に受けるオペラで大当たりをして大金持ちになった最後の作曲家でもあります。そんなプッチーニは交響曲も協奏曲も書いていませんが、学生時代や機会に応じて書かれた管弦楽、弦楽のための作品がわずかにあります。「菊の花」（原題は“菊”のみ）はイタリア国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世の次男でスペイン王であったアメデオ1世が1890年に亡くなったのを偲んで書かれた弦楽四重奏のための7分弱の追悼曲です。（後に作曲者本人が管弦楽に編曲しています。）イタリアでも菊はお墓参りに使われる花のようですね。

【2】ヴェルディ：弦楽四重奏曲ホ短調

ジュゼッペ・ヴェルディ（1813－1901）はサッカーの応援歌として定番となった凱進行進曲を含む「アイダ」をはじめ、「椿姫」、「リゴレット」など多数のオペラで成功をおさめてやはり大金持ちになったイタリアの作曲家です。その作品は多くのイタリア国民に愛され、晩年には「国民の父」とまで呼ばれ亡くなった際には国葬が営まれました。オペラ以外の作品としては「レクイエム」が有名ですが、管弦楽曲もいくつか、そして弦楽四重奏曲が本日演奏されるホ短調の1曲のみ存在しています。この曲は1873年にナポリでの「アイダ」公演を待つ余暇に書かれたということです。

第1楽章 Allegro

第2楽章 Andantino

第3楽章 Prestissimo

第4楽章 Allegro assai mosso

の4つの楽章からなります。オペラの作曲家ということから想像されるイメージは全くなく、第4楽章はフーガです。

【3】バッハ：鍵盤（クラヴィーア）協奏曲第3番ニ短調BWN974より

J. S. バッハ（1685－1750）が活動していた時代、音楽の本場はイタリアであり、後進国ドイツの作曲家はこぞってイタリア詣でをしてイタリア音楽の吸収に努めていました。職務に忙しかったバッハはイタリアに行くことはできませんでしたが、たくさんのイタリア音楽の楽譜を収集して研究しており、その一環としてヴィヴァルディなどの作品を鍵盤楽器用に編曲しています。今回、黒田さんが演奏する鍵盤（クラヴィーア）協奏曲第3番も、このような編曲作品の一つであり、原曲はアレッシاندロ・マルチェロ

(1669-1747)のオーボエ協奏曲ニ短調です。このオーボエ協奏曲はイタリアのバロック時代のオーボエ協奏曲としては最も有名な曲の一つであり、第2楽章アダージョは映画“ベニスの上”で用いられています。今回はそのアダージョと続く第3楽章のプレストが演奏されます。

【4】 ショスタコーヴィチ：ピアノ五重奏曲

旧ソビエト連邦の作曲家ドミートリ・ショスタコーヴィチ(1906-1975)の代表作は15曲の交響曲ですが、同じく15曲の弦楽四重奏曲をはじめとして多数の室内楽曲も書いています。ピアノ五重奏曲は第2次世界大戦の只中の1940年(交響曲では第6番と第7番の間)に作曲され、1941年のスターリン賞第一席を受賞しています。ショスタコーヴィチの他のスターリン賞第一席受賞作品は交響曲第7番とオラトリオ「森の歌」で、ともに大衆向けの分かりやすい音楽です。このピアノ五重奏曲も一部に晦渋な部分がありますが、分かりやすく共感できる部分を多く持っています。次の5つの楽章からなりますが、第1楽章と第2楽章、第4楽章と第5楽章は続けて演奏されます。

第1楽章 Prelude: Lento

第2楽章 Fugue: Adagio

第3楽章 Scherzo: Allegretto

第4楽章 Intermezzo: Lento

第5楽章 Finale: Allegretto

第3楽章スケルツォの最後は華々しく終わり、拍手が起こりがちですが、まだ全曲の半ばです。ご注意ください。逆に第5楽章の終わりは静かにあっさり終わります。